

【映像】

## アート・アニメーション・フェスティバル 2010

会 期：2010年7月27日(火)－29日(木)、31日(土)、8月1日(日)[5日間]

＊7月30日(金)は休映(文化情報センター・ゼミナール「はじめてアート講座 2010」を開催)

会 場：アートスペース A

### ■主旨

「アート・アニメーション・フェスティバル」は、映像系機器のデジタル化が進むなど、個人レベルでのアニメーション制作が、以前にくらべ容易になったことに伴い、作り手の裾野が広がるとともに、意欲的な作品が生み出されるようになった、自主制作アニメーションの分野に注目し、映像表現の新しい状況を照らし出すべく、2007年にスタートした。これまでに、商業ベースで公開される劇場用作品やテレビ・アニメーションなどとは異なり、鑑賞する機会の少ない自主制作作品や、作家性を重視して作られるアート系の作品、アニメーションの歴史を学ぶ上で重要といえるクラシック作品などの紹介を行ってきた。

今年の「アート・アニメーション・フェスティバル 2010」では、ヨーロッパ・アニメーション界のゴダールとも賞賛される、エストニアの作家プリート・パルンの作品を特集した。大胆で不思議な色合いと独特な描線が生み出す、魅力的なキャラクターと不条理な世界は、20世紀から今世紀にかけてのアニメーションの歴史において、揺るぎない独自の位置を占める、と評価されている。この特集では、1977年のデビュー作『地球は本当にまるいの？』(2006年デジタルリマスター版。当初、邦題は『世界は本当にまるいの？』であったが開催直前に変更になった)から、新しいパートナーであるオルガ・パルンとの共作により新境地を示した近作『ガブリエラ・フェッリなしの人生』(2008年)や最新作『雨のなかのダイバー』(2010年)までの主要作品を集め、さらに『パルノグラフィ』(2005年)と『法王のいない一夜』(2006年)という2本のドキュメンタリーを併せた、パルン作品の入門編としてもふさわしいプログラムを組んだ。

また、アニメーションの基礎的な歴史を学ぶ上での最適なソフトとして、昨年上映し好評だったDVD「世界アニメーション映画史」の続刊に当たる第11－20巻(当センター・アートライブラリー所蔵)を上映した。1930－50年代のアメリカ作品を中心としたこのプログラムでは、この時期にアニメーションが技術的に発展するとともに、表現の上においても深化していったことが、実作を通じて具体的に理解できる。

加えて、自主制作作品の現在を照らし出すことを意図して、昨2009年に開催された「第3回愛知デジタルコンテンツコンテスト」一次審査通過作品を上映した。今日の映像表現において、コンピューター・グラフィックスが、映像表現の一つのツールとして定着しつつ

ある状況において、次代をになう若いクリエイターたちの創作的な成果を示した。

## ■結果

2007年に始まった「アート・アニメーション・フェスティバル」は、自主制作アニメーションの領域で台頭してきた、日本の若手作家の作品を積極的に取り上げ、新しい作家の発掘と紹介を積極的に行ってきた。その中から、昨年「イメージフォーラム・フェスティバル2009」に出品を果たした山田園子や、今年「あいちトリエンナーレ2010」への出品が決まった有吉達宏や岡田昭憲らが登場したことは、特筆すべき成果といえるだろう。

こうした状況の変化を考慮し、今回のメイン・プログラムとして、アート・アニメーション界の巨匠というべきエストニアのプリート・パルンの特集を据えた。プリート・パルンの作品は、過去に日本でも何度か上映されているが、デビュー作から最新作までの流れを代表的な作品を押さえて構成した今回のプログラムにより、初期から現在までの経歴の中で、作品ごとにテーマや内容に即して、ポップアート風であるとか、銅版画風であるといった具合に、多彩な描法や画風を用いるという、透徹した思考に基づき高度なテクニックを駆使する優れた作家であることが目の当たりになった。一部の観客からは、難解であるとか、重苦しいといった声もあったが、彼の制作の背景を知ることが出来る2本のドキュメンタリーを組み込んだプログラムは、作品の理解の助けになったと思われる。また『地球は本当にまるいの？』や『トライアングル』（1982年）、『ホテルE』（1992年）など、漫画映画的な手法を慣用した比較的分かりやすい作品もあり、全般的な観客の反応は良かった。

フェスティバルのもう一つの柱となった「世界アニメーション映画史」第11～20巻は、ジョージ・パルの初期作品をのぞき、1930～50年代のアメリカのカートゥーン（短編漫画映画）で構成されていた。“世界”と冠していることを考慮すると、ややバランスの悪い感じがするが、逆にいえばこの時代のアメリカ作品のレベルが高く、アニメーションの歴史を語る上で決して外せない、重要なものばかりであることの表れともいえる。子供向けの無邪気で単純だった漫画映画が、ボブ・克蘭ペット、テックス・アヴェリー、チャック・ジョーンズといった才能ある作家の登場により、風刺や皮肉の効いた大人向けの内容に変わり、さらに意味の世界を超えた不条理的なギャグに到り、ほとんどシュルレアリスムと同質の世界へと突入してゆく展開が、具体的に作品によりたどることが出来るのは、貴重な体験であったといえるだろう。こうした成果が、今日のアート・アニメーションにも流れ込んでいることは、プリート・パルンのいくつかの作品を観れば明らかと言える。

なお入場者数は昨年度の数字を下回ったが、開催が大学の期末試験の時期に重なったことなどが、原因として考えられる。